

Terry Lynn Karl, *The Paradox of Plenty: Oil Booms and Petro-States*, Berkeley: University of California Press, 1997, xviii + 342p.

石油価格が跳ね上がった1970年代、ブームに湧いているはずの石油輸出国が数年もしないうちに、揃って財政赤字、国際収支赤字、対外債務の累積、インフレ、そして政治的不安定に苦しんでいた。ベネズエラ、イラン、ナイジェリア、インドネシアと経済・社会構造や経済発展の水準、政治体制も全く異なるこれらの国々が、なぜ同じような問題を抱えるようになったのか、というところに著者の問題意識がある。

この点に関してはオランダ病の議論があるが、著者はオランダ病のスイッチ（極端な財政支出・投資の拡大による総需要の拡大）は自動的に入るものではない、それらの国にはスイッチをオンにしてしまうような何か共通のしかけがあったはずであると考ええる。

本書は著者のフィールドであるベネズエラの事例を分析の中心に据え、他の石油国との比較で議論を展開する。政府の財源が何であるかが政府の制度的発展に影響を与え、そのようにして規定された制度的枠組みが政府に対して政策オプションの幅を狭めてしまう、という制度論的、ポリティカル・エコノミー的アプローチをとる。すなわち石油が主要財源である国は、石油国であるがゆえに政府がある一定の制度的発展をたどり（Petro-State）、それが最終的にオランダ病のスイッチをオンにするような政策

オプションしか政府に残さなくなるという議論であり、それがつまり“Paradox of Plenty”なのである。

なお著者はスタンフォード大学のラテンアメリカセンターの所長である。（坂口安紀）

泊みゆき・原後雄太著『アマゾンの畑で採れるメルセデス・ベンツ』築地書店 1997年 218ページ

開発と環境保護をどう調和させるかは人類に課せられた重く困難な課題である。一方的な環境保護では具体的な解決策にならない。

本書の著者は、メルセデス・ベンツ社とアマゾンの人口たった200人の村の共同事業（捨てられていたココナッツの殻を利用した自動車のヘッド・レストの生産）に、持続可能な開発の一つのありようを見ている。メルセデス・ベンツ社はヘッド・レストのほか多様な内装材にアマゾン産の自然素材を利用している。重要なのは、これらの事業が援助ではなく、ビジネスとして実践されていることである。事業の主体である企業と農民をつないでいるのが、国立パラ大学に事務所をおき農民の生活向上と環境保全を目的としたポエマ計画（アマゾン貧困撲滅環境計画）である。

著者は、研究開発、事業の企画などでポエマ計画に情熱を注いできた人々やアマゾンの農民の努力を熱く語り、翻ってわれわれ日本人に産業開発と環境保護との調和という課題をつきつけている。

（小池洋一）

アロンソ・サラサール著 田村さと子訳『暴力の子供たち——コロンビアの少年ギャング——』朝日新聞社 1997年 225ページ

コロンビアにおける「暴力」の主体は多様である。左翼ゲリラ、麻薬密売組織、政府軍、警察、パラミリ、自警団。本来ならば市民を防衛すべき正規軍や警察が、暴力の主犯となり得る。必ずしも、体制対反体制という武力抗争だけではない。さまざまなシナリオにおいて、対立の構図と暴力主体とは、公には明らかではない。実際に手を下すのは、上記のいずれの範疇にも属さない、契約によって殺人を請け負う、プロの殺し屋である。しかも、その大半が、自分の生まれ育った地域社会を基盤に団を組織する、貧しい10代の若者たちなのである。

著者のサラサールは、長年、敵対関係や暴力行為が集中するアンティオキア県、メデジン市の貧困居住区に住み込み、こうした青年たちとその家族、住民たちへインタビューした。本書はこれらをもとにした証言集である。

原題の「俺達は種子を残すために生まれてきたのではない」が示すように、彼らは短命を承知で、死と隣り合わせで殺人を生業とする。その異常な価値観が成立するのは、コロンビア—とりわけアンティオキアの一社会が、富と教育を持たないものが、正攻法では決して社会的に上昇できない、格差の二重構造で固められているからだ、というのが背後にあるメッセージである。

この国に現実にある、死の日常性を正視するには

格好の書だが、同時に、読後はやるせない絶望感に襲われる一冊である。
(幡谷則子)

藤井満著『ニカラグアを歩く：革命と内戦の今昔』日本図書刊行会 1997年 186ページ

本書は若い著者が、サンディニスタ政権時代のニカラグアをまさに足で歩いて旅をして、そこで出会ったさまざまな人々との交流を綴った旅行記である。

本書の魅力は、なんといっても、ニカラグアの庶民、しかも、サンディニスタ政権派、コントラ、カリブ海側のミスキートなど、ニカラグア社会でさまざまな立場にある人々の暮らしぶりが、気負わず、生き生きと描かれている点であろう。

革命支援のボランティア活動を軸にしながら、多彩な人たちと知り合いになってゆく、著者の柔軟な行動力に感心しつつ、外国人の来訪者を懐深く受け入れる人なつつこいニカラグア人気質が伝わってきて、楽しい。

内戦時代のニカラグアというと、重苦しく、深刻なイメージを抱きがちだが、本書を読むと、いつの時代にも生き生きとした庶民の生活はあったのだと明るいい気持ちになれる。

本書の終幕は1996年の著者のニカラグア再訪で、すでにサンディニスタ政権は過去のものとなり、当時の若者たちは、成人してそれぞれの生活を抱えていた。といってもまだ20代だったりするのだが。

一度ニカラグアを訪れてみたい、そんな気持ちにさせる一冊である。
(村井友子)